

# ぽっかりあいた空洞

喜 多 登

宮下教授が逝ってもう1年が経とうとしている。だがそこにあけられた空しさはどうであろうか。一向に埋まらない。実に惜しい大きな人物を失ってしまった。

ここに宮下教授の面影を辿り、過ぎし日のことどもを思い浮べながら長恨歌を奉げたい。

## 1 大人の面影

当時日本全国から英才の集まった満鉄調査部に入られて、満州で勤務されていたせいか、あるいは北海道育ちのせいか、宮下教授には大人の風貌と小事にこだわらない大人の度量と、事に処しては動ずることなく適切果断な処置を下すという大人の振舞を持った方であった。それにも増して常に心にあるあの温さはどうであろうか。来る者誰1人として拒むことなく、あの温さにつつまでしまう。

宮下教授の室は、いつしか誰かれとなく屯するようになっていた。心の温さは日だまりを求めて群がる生き物共通の性同様に、人はいつしかひかれて集ったのであった。

今その人はいない。

一方では大人の器量を持ちながら、他方では実に洗練された感性の持ち主でもあった。音楽を愛し深く理解し、舞台芸術をこよなく愛したあのすばらしい感性は最早接することも出来ない。時には歌手のリサイタルを聴いた後で交した高い芸術的言の葉は今何処。時々ベルマン・ボルカでの興に一つの花を添えてくれたあの歌声は今何処。

ウィーンからイタリアと研究の合間に訪れて楽しまれたオペラ観学の数々を目を輝かせながら話をしてくれたその時の様子が目に浮ぶ。入手難の入場券を苦心して手に入れられ、ウィーンオペラの魅力をあますことなく楽しまれた様

が目に見え。おそらくはあのすばらしいオペラ・ハウスに響き渡った歌手の魅力を心ゆくばかりに楽しめたのに相違ない。いやそれどころか、この建築的にも魅力あるオペラ・ハウスの構造的な美、それにマッチした数々の絵画、そしてオペラを愛しこのオペラの殿堂を大切にしている音楽ファン・ウィーン児、この雰囲気こそ心ゆくばかりに満喫されたに相違ない。

このようにすばらしい音楽的感性は、物の見方や考え方にこよなく温味を加えて、表現をして穏やかさの中にきらきらした輝きを添えながら展開される。これは技巧ではない、心の動きである。これが接する人すべてに何とも言われない魅力を感じさせるのだ。心の底での琴線にふれ響き響かせる貴重な人であった。

## 2 大陸的なウィット

宮下教授はまたウィットに富んだ人でもあった。落語を聞き人情話も聞き、日本人本来の情味豊かな話を愛されていた。しかしそれだけが彼の本意ではない。その奥にもう一つ楽天的とも言える陽気さがあった様である。

ウィーン滞在の折に、よく手紙の端に乗せられた“小話”がある。彼の心の琴線にふれた小話である。この小話は落ちがあるが落語とは違う。当時のウィーンの新聞に載った風刺的なものがあったり、おそらく会話の中で集録された興味ある風刺的人情話があったり、多分に彼の創作又は修正によるものと思われるものがあり、通常の手紙とは異なっていた。この小話を通して当時の日本人の心をやんわりと批判していたように思える。

直載的な比喩よりもこの小話を通して比喩の方が、人の心の奥底に浸透する。今でもふとした会話の中に、宮下教授いませば、きっとこらでやんわりと小話一つでこの場を包んでくれているに相違ない、と思う事しばしばである。

## 3 ぽっかりあいた空洞

宮下教授去りて今いない。あのウィットに富んだ小話も、興高じて聞かせてくれたロシア民謡も今や追憶の彼方にしかない。言い知れない虚しさが去来する。だが心の琴線にふれた心の温みは遠赤外線のように今なお思い出多い人々

の胸の内を温めてくれている。

去りにし兄の面影に

人、ひと知れず涙す

兄の声絶えて 聞くすべもなし

はや一年

何すれぞ 兄急ぎ給いそ

兄の残せし余熱の温さを

ただ心に感ずるのみ

兄 何すれぞ急ぎ給いそ